

紙フィルム上映会で甦るあのころ

フィルムこそ

我が人生

紙フィルムに描かれた総天然色の

『のらくろ肉弾戦』がスクリーンに映し出され、

弁士の名調子とともに大団円を迎えた時、

大林宣彦監督は「活動写真ですねえ」と

感嘆の声をもらし、

紙フィルム映写機を持参した

松本夏樹氏は満足げにうなずいた。

興奮覚めやらぬ2人は、

上映後、紙フィルム映写機の魅力や、

大林監督の幼い頃の

映画との数奇な出会い、

果ては現代人に贈る

「手回し映写機の勧め」まで、

懐かしの名機たちを前に

思う存分語り合った。

対談

映画作家

映像史研究家

大林宣彦 × 松本夏樹

取材・文 / 佐保圭
写真 / ミワタダン
協力 / 活動弁士・映写技師 小崎泰嗣

松本夏樹

(まつもと・なつき)
 武蔵野美術大学・大阪芸術大学非常勤講師。幻燈機をはじめ玩具映写機やフィルムのコレクションも多く、大阪造形センター、宇都宮美術館などで上映し、レクチャーを行う。「カイロプティック商会」の名でおもちゃ映画を上映するなど、実践を伴った研究活動を行う。監修：「視覚玩具の曖昧な対象」(制作・著作=Pinhole Lodge Syndicate/カイロプティック商会)
 松本夏樹インタビュー
http://www.log-osaka.jp/people/vol.68/pp1_vol68.html

日本で発明された 幻の「紙フィルム映写機」とは？

松本：「こちらが紙フィルム映写機『レフシー』のA型です(写真右下)。同じレフシーで装置がトランクに入っているタイプもあります。いわゆる箱形ですね。」

大林：「以前、私が見たのも箱形のものでしたが、もっと大きかったように記憶していますよ……」

松本：「それは、レフシーではなく「カテイトーキー」だったのかもしれない。蓄音機と連動させて、音の出るトーキー映画が楽しめるカテイトーキーは、レフシーのパーフォレーション(編集注：フィルム送りのつめをひっかけるための穴)が1個なのに対し

て2穴式でしたし、大きさも1回り大きかった。あと名古屋に『月虎

印安全映写機』というのがあったと聞いていますが、現物は見たことありません」

大林：「歴史的には、いつごろ登場したのですか」

松本：「レフシーは昭和8(1933)年、東京の家具店でつくられました。その後、大阪でカテイトーキー

がつくられた。実は「材料が紙のフィルム」という点だけで言うなら、ドイツのアグファ社が「オザファン」という紙フィルムをすでにつくっていました。「米国のイーストマン・コダック、欧州のアグファ」という感じで、フィルム製造会社の双壁をなしていて、セルロイド・フィルムに関しても、いろんなタイプをつくっていました」

大林：「ええ、確かにアグファのフィルムはよかったですね。とても渋い画調の出るフィルムです」

松本：「ただ、このオザファンは透過式の紙フィルムでした。特殊加工で強くはしていますが、トレーシング・ペーパーやセロファン紙のようにべらべらに薄い。私も実物を何本か持っていますが、向こうが透けて見えるほど薄いんですよ」

大林：「おもしろいなあ」

松本：「つまり、「反射式」の紙フィルムとその映写機は、日本で生まれた独自の技術だったわけです」

大林：「実は、紙フィルムを初めて見た時、がっかりしたんですよ。戦時中で物

がなくて、蓄音機の針も鉄から竹、爪楊枝となっていた。だから『映画のフィルムもどうこう紙になったか』と落胆したけれど『でもこれなら色を塗ればカラーになるぞ!』と思い直したのが最初の印象ですね。当時、セルロイドのフィルムはまだモノクロームでしたから」

松本：「レフシーの誕生と戦争に直接の関係はありません。セルロイドのフィルムは高価で、現像に必要なのに対して、紙フィルムは材料費が安く、カラーについても印刷は簡単。ですから、急激に広まったのだと思われます。むしろ、戦争は紙フィルムの終焉に関係していました。戦時中の奢侈禁止令で『おもちゃはダメ!』と政府が言い出した時、特にセルロイドは火薬の原料で統制物資でしたから、子どものおもちゃである家庭用の手回し映写機のフィルムに使うなど言語道断で、その煽りを受けて、同じく高級おもちゃでしかない紙フィルム映写機も、だんだん縮小せざるを得なくなっていくようです」

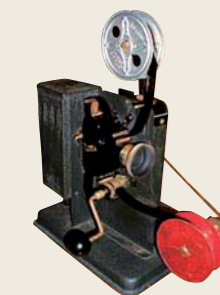
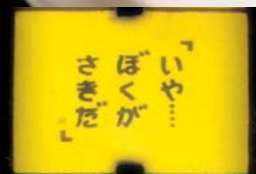
大林：「なるほどねえ。そう言えば、その後はあまり出会わなかったですね」

松本：「それに高いですから。フィルムが1本80銭とか」

大林：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」



箱形のレフシーと紙フィルムトランクに入ったレフシー普及型。紙フィルムは、当時の大日本印刷が請け負い、最盛期には200あまりの作品数がそろっていた。大半は漫画映画だったが写真を使った映画もあった。



オザファンフィルムと16ミリ映写機
 1920年代末～30年代にかけて販売された、ドイツ製の透過式紙フィルム。透過式なので普通の16ミリ映写機が使えた。紙フィルムといってもセロハン紙を使

がなかったから、蓄音機の針も鉄から竹、爪楊枝となっていた。だから『映画のフィルムもどうこう紙になったか』と落胆したけれど『でもこれなら色を塗ればカラーになるぞ!』と思い直したのが最初の印象ですね。当時、セルロイドのフィルムはまだモノクロームでしたから」

松本：「レフシーの誕生と戦争に直接の関係はありません。セルロイドのフィルムは高価で、現像に必要なのに対して、紙フィルムは材料費が安く、カラーについても印刷は簡単。ですから、急激に広まったのだと思われます。むしろ、戦争は紙フィルムの終焉に関係していました。戦時中の奢侈禁止令で『おもちゃはダメ!』と政府が言い出した時、特にセルロイドは火薬の原料で統制物資でしたから、子どものおもちゃである家庭用の手回し映写機のフィルムに使うなど言語道断で、その煽りを受けて、同じく高級おもちゃでしかない紙フィルム映写機も、だんだん縮小せざるを得なくなっていくようです」

大林：「なるほどねえ。そう言えば、その後はあまり出会わなかったですね」

松本：「それに高いですから。フィルムが1本80銭とか」

大林：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

大林：「1銭玉をもっていくとアイスキャンデーが10本買えた時代ですから(笑)、それは高いですね」

松本：「デパートでしか売っておらず、戦争前には寿命が尽きてしまったと考えられています」

大林：「当時、「のらくろ」の本なんかを買っても、カラーは最初の何ページかで、あとは2色カラーになったりしました。だから、この紙フィルムのような総天然色っていうのは、すごく贅沢なものだった」

松本：「色が独特ですよ。レフシーもカテイトーキーも、だいたい不思議な色づかいをしています」

大林：「(紙フィルムを見つめながら)この黄色がきれいにいるっていうのは、まさに当時の「総天然色映画」ですよ」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

松本：「おそらく、紙フィルムに当たって反射した時の色味を考えて、こういう色味をしているんじゃないかな。なんだか、ちょっと間抜けな色なんですね(笑)。僕はこの間抜けな色が大好きなんです」

大林宣彦

(おおばやし・のぶひこ)
 映画作家。学生時代、8ミリを使った自主製作映画の先駆者として活躍し、CMディレクターでもありつつ、1977年の『HOUSE』で商業映画界にも進出。以後、『転校生』『時をかける少女』『さびしんぼう』の尾道三部作などのヒットを飛ばし、現在に至る。斬新かつ鮮烈な映像から「映像の魔術師」と称される。2007年夏、『22才の別れ Lycoris-葉見ず花見ず物語』と『転校生 さよなら あなた』が封切られる。